

山口と台湾を結ぶ道を拓く

Toward the Future between Yamaguchi and Taiwan

井竿 富雄・吉永 敦征

IZAO Tomio YOSHINAGA Nobuyuki

Abstract

This report is on the historical relationship between Yamaguchi and Taiwan discovered through research and collaboration with local organizations. An oil painting by Chen Cheng-Po, the famous artist in Taiwan was discovered at the Hofu City Library, Yamaguchi Prefecture in 2015. The team from Yamaguchi Prefectural University and persons from Hofu City visited Chia-Yi City, hometown of the artist. The staff and students of Yamaguchi Prefectural University started studying the historical relationship between Yamaguchi and Taiwan, and the people of Hofu City created regional friendships with Chia-Yi. This is an example of “co-creation” of the region’s globalization contributed to by the university.

はじめに

本報告は、山口と台湾という、一見すると突飛に見える地域を結ぶ道が、ある一点から劇的に拓けていったことを示すものである。内容としては本学の掲げる「大地共創」を、期せずして実際の行動として実現していたことを示す報告であるが、学術的な正確性も期するように注意していきたい。

本報告は、国際文化学科でこれまで実施してきた「地域実習」のうち、海外フィールドワークの一つとして実行してきた「台湾と山口の関係」に関するものと、防府市民が自らの街にあった世界史的に重要な文化遺産を発見し、その価値に複数の当事者が気づいていく過程とが複雑に交差する形で描かれている。これらの活動は元来別のものではあったはずであるが、大学側が地域の流れを掬い取る形で科目として実現し、そこで得られたものをさらに地域へ向けて還元する、という過程を持っていたこともまた事実である。筆者二人はフィールドワークを元来専門としていたわけではない。そのため、このようなものにあってもフィールドワークの原則を逸脱したりしている可能性がないとは言い切れない。この点は読者諸賢からの叱正を請わなければならない。

現在進行形の点もあって非常に時間の切迫する中で書かれたものであり、同様の先発事例を検討したりする部分があまりないため論文としてではなく報告とせざるを得なかったことは筆者として遺憾である。とはいえ、記録として示さなければ、本学より受けた援助や、防府市民、そして台湾各地の人々がこの交流にささげた有形無形の努力（防府市民有志、そして台湾の陳澄波文化基金会在してきた努力は特にここに記しておかなければならない）について筆者の側から何も提供できないという結果を招いてしまう。これは筆者としては明らかに遺憾である。今回は、あえて率直に「拙速を尊ぶ」形でこの原稿を記した。

一 台湾との縁がひらかれる

山口と台湾の歴史が新たに見つかったのは、意外なところからであった。宗教史研究者・僧侶で防府市在住の児玉識・龍谷大学名誉教授が、防府市からの委嘱を受け、官僚・政治家であった上山満之進の伝記¹を執筆するための調査をしたことがその端緒である。現在の防府図書館の倉庫に、大きな油彩の風景画があることが調査の過程で明らかになった。防府市立防府図書館は、上山満之進が生涯の最後にあたり、自身の財産を寄贈して作らせた「防府市立三哲文庫」が前身である。そのため、防府図書館には、上山満之進の関係文書、生前の蔵書も所蔵されている。その中にこの絵画が存在した。この風景画は戦後も防府図書館の閲覧室に長い間飾られていたが、その由来や作者については忘れられていた。

児玉氏はこの絵画が、「東臺灣風景大額」と財産目録に記されたものであり、戦前に刊行された上山満之進の伝記²にその経緯が記されていたことを突き止めた。上山は台湾総督を務めたが、退任時に受け取った慰労金の一部、約1000円で、当時台湾の新進気鋭の画家陳澄波に絵画を依頼していたことが記されていたのである³。児玉氏は親交のあった県立大学の安溪遊地教授（当時）にこのことを知らせ、その後2015年に、この絵画の作者・陳澄波の偉業を継承する団体・陳澄波文化基金会（本部は台湾・嘉義）に連絡が行った。その結果、この絵画は台湾で「存在は知られていたが失われた絵画」となっていた作品であったことが確認されたのである⁴。再発見者児玉氏は台湾でもその名を知られることになった⁵。

筆者のひとり井竿は、この時地域実習科目の担当者となることが決まっていた。偶然であるが、この当時実行されていた海外フィールドワークの一つが、出発直前に爆弾テロで打ち切りになり、参加予定の学生のために参加先を探さなければならなくなった。そこで、臨時に台湾・嘉義と、台北での実習を合わせた海外フィールドワークが企画された（実行したのは2016年の3月）⁶。引率は安溪・井竿で行った。上山満之進という人物も全く未知なら、陳澄波という人物についても筆者はまるでこの時点で知る所がなかった。このフィールドワークに参加を希望した学生は二人であった。急遽、児玉氏による上山についての講義などを含めた事前学習が行われた。もちろん筆者も上山や陳澄波、そして同時代の日本と台湾、あるいは山口県と台湾とのかかわりについて学んでいかなければならなかった（それはいまだに続いている）。山口と台湾との関係を歴史的に再確認し、人々の往来や交流・相互の地域のひとつとに寄与する研究と教育がこの時始まるとは、それでも考えていなかった。

図書館の絵にまつわる二人の人物については以下のとおりである。まず上山満之進は、1869年、現在の防府市江泊に生まれた。苦学して、当時の山口高等中学校から、毛利家の奨学金を得て東京帝国大学に学んだ。高等文官試験に合格し、まずは官界へと踏み出した。ただ、政党の勢力伸長の中、上山は山口で優勢となった政友会ではなく、対立政党の憲政会・民政党系の政治家とみなされていた⁷。そのことが上山のキャリアに影響した。1913年、第三次桂内閣によって熊本県知事に任命されたが、1914年には内閣が交代したため上山は更迭された（帝国憲法時代県知事は政府の任命制）。また、場合によっては自らの上司との全面対決もいとわなかった。上山は同じ山口出身者である寺内正毅内閣にあって仲小路廉（周南出身）農商務大臣と政策の素案作りなどで大激突した⁸。

上山は貴族院議員を経て1926年台湾総督に任じられた。妻と死別した直後の任命であった。上山の政策で注目すべきは台湾銀行危機（1927年）の救済に尽力したことである。台湾銀行は台湾島内の発券銀行であったが、この当時融資した企業鈴木商店の経営破綻に巻き込まれていた。国内的には台湾銀行救済問題が政争となり民政党の若槻礼次郎内閣が倒れるという政治危機にも発展した事件だったが、上山は台湾島内への経済危機波及を回避することに成功した⁹。また、前総督伊澤多喜男のもとで構想されたと言われる台湾美術展覧会、通称「台展」が始まったのは上山総督時代である。ここでのもう一人の主演、陳澄波との接点が生まれてくることになった。上山は1928年の「台中不敬事件」（台湾を訪れた皇族を朝鮮人独立運動家が襲撃）で警備責任を負う形で辞任した¹⁰。総督退任後になって、上山は陳澄波に絵画作成を依頼している。

台湾総督退任後は再び貴族院議員、そして枢密顧問官を務めた。枢密顧問官時代は、天皇機関説事件に伴う「国体明徴」政策のもとに設置された「教学刷新協議会」のメンバーとなったが、「明徴すべき国体とは

結局何なのか」と問い続けていたことが最近になって指摘された¹¹。晩年、自身の資産を防府市に図書館建設という形で寄附し、これが「防府市立三哲文庫」となって実現した（江泊の実家も地域に寄贈し、現在も公民館として存続している）。2018年は上山死去（1938年）80年として記念行事が行われたが、これは次節で述べる防府市民尽力の成果である。

上山が絵を依頼した陳澄波は、台湾が日本統治下に入った1895年に嘉義で生まれた。総督府国語学校（現在の台北教育大学）を卒業した。この時代に画家・美術教育者である石川欽一郎に絵画を学んだことで芸術に開眼した。一度は公学校（台湾人の子供のための初等教育機関）教員になったが、職を辞して東京美術学校に入学し、さらに画塾等に通って絵画を学んだ。在学中、台湾人画家として初めて帝展に入選した。上山が絵を依頼したころは、上海の美術学校の教授を務め、時に台湾でも展覧会を開くなど、台湾の代表的画家として活躍していた時代である。日中戦争勃発により（当時台湾人は「日本人」だったので陳澄波は敵国民とされた）故郷嘉義に戻り芸術活動をした。第二次世界大戦後も、中華民国政府の下で「第一回台湾省美術展」の審査委員に任命され、嘉義市参議員として郷土の自治に尽力するはずだったが、1947年の2・28事件に際して、中国語が話せたため、反乱を起こした市民と鎮圧する政府軍の交渉役に名乗り出た。しかし反乱の煽動者とみなされて政府側に逮捕され、嘉義駅頭で公開銃殺された。陳澄波が政治犯とされてしまったことで、台湾では作品のいくらかが失われている¹²。1987年の民主化開始・台湾自身の中国からの自立志向の高まりとともに名誉回復・再評価され、現在では台湾近現代美術史の重要な画家として位置づけられている。このような陳澄波再評価の機運の中に日本で作品が発見されたことの意味は大変大きかった。

ただし、絵画発見のインパクトを筆者はこの時点でまだ理解していたわけではない。それはこののち実際のフィールドワークや関係文書の解説といった作業の中で身に染みて理解することになった。

二 歩く・止まる・考える

台湾・嘉義への旅は、最初から巨大な問いかけの連続であった。陳澄波と上山との関係、そして台湾と山口との関係がどのようなものであるかよくわかっていなかったからである。しかし、そのような筆者の疑問をよそに、「地域実習」のフィールドワークに陳澄波のことが盛り込まれた瞬間、最初から大きい事業がいくつも出てきた。最初は、陳澄波の長男・陳重光氏に学生と共に聞き取りをすることになったことである。学生と筆者（教員）が同レベルでは話にならないので、事前学習を行い、質問事項を定め、丁寧に聞き取って文字起こしという作業をしていかなければならなかった。陳重光氏は高齢ではあるがクラシックで正しい日本語で会話をするため、われわれ日本人の方が話を文字変換するのに困るという事実があった¹³。

次に、この聞き取り実現に尽力いただいた台湾・国立中正大學との交流事業につき提案を受けた。国立中正大學・台湾文學研究所は山口県立大学との交流を希望し、3度ほど訪問して交流を重ね、交流協定（MOU）を締結したいという意向を示された。しかしこれは率直に書かねばならないが、県立大学側での手続きが動かず止まったままである¹⁴。

さらに、学術的なレベルで重大な貢献をする事業が提起された。陳澄波の日本語手稿を文字起こしすること、である。陳澄波の遺品には、数々の原稿がある。中国語原稿もあれば日本語のものもある。中国語のものは現地で文字起こし可能であるが、日本語での手稿を文字起こししてほしいという話が出て来た。その中でもかなり分量のあるものに、日本語の作文練習帳と、東京美術学校時代に受講した「哲学」の講義ノートが含まれていた。安溪教授が作文練習帳の文字起こし・内容分析に取り組んだが、哲学ノートは、その内容や専門用語のため井竿の手には負えない。そこで、筆者のもう一人吉永がこの手稿を起こし、このノートの持つ意味を解説する作業に取り組んだ。井竿ののちに新聞記事となった1934年の帝展西洋画作品批評の草稿になったノート（スケッチブックの中に書き込まれていた）を文字起こしした。図1のようにこの学術的成果は現在少しずつ公開されつつある¹⁵。この過程で体感的に理解されたのは、台湾の中の「日本時代」である。日清戦争後台湾は清から日本に割譲され、その後の近代化や社会変化は、日本を通して入ってきた。この時代に関する台湾で刊行された史料集を見ると、解説文は読めなくても史料本文は日本語のため読めるの

である。ここに既に、歴史理解や解釈の複雑さを見る思いがした¹⁶。そして、植民地時代に、宗主国を通して知識や技術を身につけ宗主国を超えて世界へとつながろうと尽力した人々の努力の足跡を見ることになった。

この間、山口でも徐々に台湾との人的文化的交流に向けた動きが高まった。絵が所蔵されていた防府で、ニュースの広まりと共に市民の関心が出て来た。そして、防府市がこの陳澄波作『東台湾臨海道路』を、専門的な保管がしづらいということで福岡アジア美術館に寄託した¹⁷ということも含めて市民がこれらのできごとに注目するに至った。さらに、絵の作者の故郷である台湾・嘉義との友好関係を結ぶことはできないのかという問題提起も上がってくるようになった。

2016年には、防府市の市民有志が嘉義を訪問することになった。この中には上山満之進の一族に属する上山忠男氏の存在もあった。たまたまこの年の地域実習で嘉義を訪問する際に、嘉義での行事にこのグループとも同行することにもなった。この時は、山口・徳地出身の実業家林方一が一代で築いた「林百貨店」を見学し、さらに台湾の専門的な研究機関である「中央研究院 (Academia Sinica)」の訪問も実現した¹⁸。

嘉義を訪問した防府の人々は「上山満之進に学ぶ会」を作り、防府でも忘れられている郷土の先人の業績をまずは発掘しようという動きを始めた。「上山満之進に学ぶ会」はこの年の年末、陳澄波文化基金会の陳立栢氏（陳澄波の孫）を招き、さらに台湾における陳澄波研究者である李淑珠氏（明志科技大学）を招聘して本格的なシンポジウムを開催するに至った。井竿もこのシンポジウムに若干協力させてもらうことができた。この時には、嘉義市長からメッセージが贈られ、会場が感激でどよめくという一瞬があったことを記憶している。このあたりから、筆者は陳澄波の作品が持つ国際的なインパクトが少しずつ体得できたような気がする。

ここまでの作業は、文字起こしの途中経過なども含めて、山口県立大学から冊子『上山満之進と陳澄波』として刊行することができた¹⁹。だが、ここで終わりではなかった。継続的な山口（きっかけは防府）と台湾との人的往来の可能性や、さらに広がりを持った台湾と日本とのつながりを知る必要があったからである。この翌年2017年には、上山満之進が総督時代に視察をしたことや、陳澄波が作品を残しているということで、嘉義県の阿里山（阿里山は具体的な山の名前ではなく、いくつかの山をまとめた地域の総称）を一泊二日で訪問することになり、この際には山口県立大学学生も含めて、日本時代に建設された山小屋（裕仁皇太子台湾訪問に併せて作ったものと説明があった）に宿泊し、阿里山を構成する山の一つ小笠原山で日の出を見るという経験もすることができた²⁰。筆者の一人吉永はこの年秋に防府市市議会議員の有志の台湾訪問に一部同行し、地域的なつながりの高まりを見ることになった（次節）。

しかし、上山と陳澄波の関係からさらに話が広がるには今一つの飛躍が必要であった。このための壮大な知的問題提起をしてきたのは、前述の陳立栢氏であった。陳氏は阿里山を世界遺産に登録する運動に着手していた。阿里山は台湾を代表する山岳地域である。そこには貴重な台湾ヒノキの原生林があり、日本時代にも古木が切り出されて利用されることがあった²¹。山口県にも阿里山のヒノキが使われた可能性があるという建物がいくつかある²²。そして、上山が総督を務めた時代に「大公園計画」という構想が出され、そのために、登山家でもある造園学者・「国立公園の父」として知られる田村剛が1927年総督府に招かれて阿里山の調査をしていた²³。1934年には「阿里山国立公園協会」が嘉義市役所に設置され、阿里山の国立公園指定運動が始まった。そして、その頃に陳澄波は精力的に阿里山地域の風景スケッチを遺していたことがわかったのである。また、陳澄波と同時代の画家李梅樹（1902-1983）にも注目することができた²⁴。

2018年の台湾訪問は、この点に関したところを見学することになった。この年からは地域実習の教員引率は経費的な関係によりできなくなった。山口県立大学学生と井竿は独自に動かざるを得なくなった。この訪問では阿里山のなかの「塔高山」に登り、その後陳立栢氏による「木が森から人間の管理する林になり、材木として切り出され使命を終えると再び森に還る」というサイクルについての説明を聞いた。また、日本

図1:2018年に出版された『陳澄波全集』第6巻。日本語作文帳と哲学ノートの写真版が収録されている。



時代に森林伐採のため大量の人が移住していた「沼平」の跡を見学した。第二次世界大戦後までこの村は残っていたのだが、1976年に謎の大火により村落が全面焼失し、国立公園地域内だったこともあってすべての住民が移住を余儀なくされたという²⁵。一見するとこれは山口とは関係のない話に見えるが、上山の打ち出した大公園構想が実現して「新高阿里山国立公園」になったこと、そしてこれが第二次世界大戦後も引き継がれて中華民国政府の下でも引き続き国立公園として保全されたこと、しかし中華民国政府は日本時代には認められていた住民の地域内居住を認めなかったことなどが隠されている。台湾という土地を理解するためにはかなり複雑な歴史が一つ一つの事項に入り込んでいることを学ばなければならないことが改めて分かる²⁶。

以上は、上山と陳澄波という二人の人物の遭遇が、台湾と山口という二つの土地を結びつけるきっかけになったこと、そして曲折を経て、回を追うごとに訪問の内容が充実発展してきたことについて述べた。まず情報を獲得し、アイデアを生み出し、そこから歩き、立ち止まって考え、さらに新しい方向へ歩みだす、というサイクルを創ろうと努力をしてきた。ここからは、このような表面上の動きの下でゆっくりと広がる、台湾と山口との関係についても述べていくことにしたい。図書館にあった一枚の絵が、大学や地域の人々を通して、その地域を国際的な局面にまでつないでいく、そしてそれが地域の人々によってさらに大きくなっていく可能性が示されている。

三 防府から嘉義へ・嘉義から防府へ

筆者のうち吉永は陳澄波が残した哲学のノートの書き起こしを行い、陳澄波が受けたと思われる哲学の知識をまとめること、哲学のノート以外の哲学資料の読解を引き受けることとなった。筆者はこの時点では台湾についての知識は皆無と言ってもよいくらいのものであった。

陳澄波が残したノートの前半部分は、彼が東京美術学校時代（1924-1929年）に受講していた修身についての授業ノートである。東京美術学校時代のカリキュラムを調べると、当時開講されていた科目は修身という科目名であったが、内容は哲学についてのものであり、さらに言えば西洋哲学入門になっており、概説的な西洋哲学の知識を陳澄波が学んでいたということを示していた。

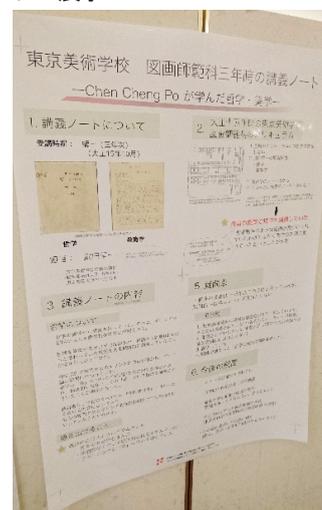
ノートの書き起こし作業に携わる過程で、さらなる資料（哲学用語のメモ、精読した痕跡がある書籍、ノートの現物）を陳澄波文化基金会において閲覧することとなった。数的には少ないにせよ、資料はネットワークを構成しているものであり、これら資料によって、少なくとも陳澄波が継続的に哲学の知識を吸収しようとしていたことも明らかになってきた。これら資料を系統づけて解釈することの必要から、台湾の研究者とのコミュニケーションも必然的に濃度を高めていくことになった。

このように、吉永のきっかけは絵画であるが、そこから画家のノートへ、そして画家の故郷台湾へ、そして台湾の研究者ネットワークへというかたちで根を広げていっていた。とはいえ、この段階においては、いまだ専門性に関してのみのつながりであったといえる。これが転換していくためには次の段階が必要だった。

2016年9月に上山忠男氏をはじめとした防府市民有志の台湾訪問を契機として、台湾から防府への逆の道筋が築かれた。これを後押ししたのは、2016年12月に本学が防府市で主催したシンポジウムである。

本シンポジウムでは、陳澄波が残した手書きノートや手稿、日本語練習帳などについて解説するポスター発表（図2）や、陳澄波研究の専門家李淑珠氏（明志科技大学）や児玉識氏（龍谷大学元教授）の講演、県立大学の台湾地域実習報告、陳澄波文化基金会の陳立栢氏、林世英氏（臺北駐日本代表處教育組組長）、毛利元敦氏（毛利報公会）の挨拶などが行なわれた。かくして、学術的な交流から、市民的な交流へ、そしてさらに次の段階である自治

図2: シンポジウムで発表した講義ノートについてのポスター展示



体での交流が開始されたといえる。台湾政府の大使館に相当する駐日代表処からの来賓に加え、陳立栢氏を通して嘉義市長からの手紙がシンポジウム宛てに送られてきたことがその証といえる。

ノートの書き起こしを引き受けてから一年が経過し、解読が困難ではあったが陳澄波の文字をほぼすべてテキストに直すことができたこともあり、吉永は2017年に台湾を再訪問した。今回は、嘉義市との交流を目指す防府市の市議会議員の一行と行程を共にすることになった。防府市議会からは松村学市議会議長を筆頭に5人が、山口県議会から1人が台湾を訪問した。台湾入りの日程はずれていたが、下記の市議会への訪問と市長との会談のスケジュールだけは調整して台湾へと出発した。市民有志の訪問に、さらにシンポジウムという学術的な裏付けを県立大学が与えたことが、ついに政治を動かすに至ったのである。学術研究が人々を動かし巻き込む原動力となっており、シンポジウムに参加した人々がお互いにつながり合うための場を提供できていたからである。さらに述べるならば、地域のネットワークにおけるゲートキーパー間のつながりを持つ場となっていたと言える。防府市民と駐日代表処、嘉義市長、毛利報公会、明志科技大学、山口県立大学が交流しつながる場が構築されていたのである。これはむしろ、ゲートキーパーがつながる場として学術交流を一つの足場にしたりと捉える見方がより正確かもしれない。

2017年10月31日に嘉義市役所を訪問した。一行は蕭淑麗市議会議長の出迎えて市庁舎に入り、日本側と台湾側でそれぞれ交互に自己紹介を行なった。筆者は陳澄波のノートを整理する作業に従事しており、日本と台湾の学術交流の可能性を探しているという自己紹介をした。その後議長室へと案内され、30分程度の意見交換を行なった(図3)。そこでは台湾における議会制度の説明を受け、議員は県と市の役割分担や選挙制度、次の地方選挙や投票率の高さなどについて相互に説明しながら見識を深め合っていたようである。

意見交換終了後には議場の視察、議会運営の方法、市民による議会参加や情報公開制度について嘉義市政府文化局局長の黄美賢氏や文化局市議会秘書長の李玲氏および秘書の呉乗芳氏より説明を受けた(図4)。議員は調度品などの質の高さや議場の構造の違いに着目しているようだった。筆者は主として情報公開について、具体的

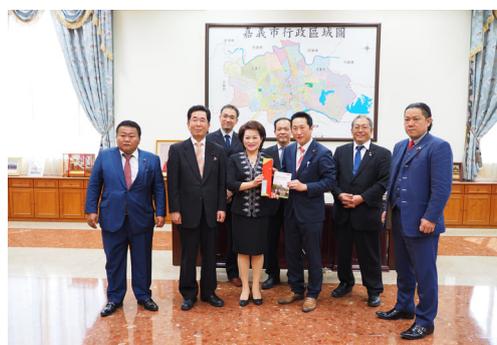
図4:嘉義市議会議場の視察



な交流案が互いに提示されていた。

嘉義市長は、年に何回か日本を訪問していることや日本酒が好みであることを述べていた。これを受ける形で山口側は、山口県出身である安倍晋三首相の推奨する日本酒があること、また山口県知事も台湾を訪れ日本酒の販促に協力していることなどを伝え、お互いの共通点を見出す作業が行なわれていた。また陳澄波と上山満之進との関係を伝えることで、以前から防府市と嘉義市は交流があったのであり、もう一度その交流を復活させましょうという提案を議員から投げかけていた。次に嘉義

図3:嘉義市議会議長室にて



にはインターネット配信を行なうシステムが整っていること、それに伴い議場に足を運ぶ市民がいなくなったことなどの説明が印象に残っている。

市役所の訪問後、市内のホテルに移動し涂醒哲市長との面会・昼食会へ参加した(図5)。参加者には陳澄波文化基金会の陳立栢氏、金龍文教基金会²⁷の蔡榮順董事長など文化事業に携わっている重鎮がいた。この時点で、嘉義市は防府市と文化的な交流を強く望んでいることが示されていた。会食の場では、日本との交流を望む意思やその強さ、そして具体的

図5:嘉義市長との会食の様子



市長は自らが手がけた政策（飲酒運転の厳罰化）を強調することで防府市との交流も実現させる能力があることを示していた。防府市が陳澄波の展覧会を行なうスケジュールで動いているので、嘉義市長を招待したいこと、またその絵画は防府市民だけではなく嘉義市民の財産でもあるため台湾からも見に来てほしいことを伝えていた。さらには映画『KANO』²⁸についても言及し、少年野球の交流事業など何らかのかたちであっても両市を結びつけるための接点を模索していた。

筆者は学術交流の可能性について言及される場面を待っていたが、残念ながらそのチャンスは巡ってこなかった。陳澄波が残した日本語資料の今後の方針やスケジュールについて陳立栢氏と打ち合わせができたことが唯一の収穫であった。この時点で、交流の場は学術から政治に移行していたのだと後に気づいた。

防府における油彩画の再発見が嘉義市市長と防府市議会議長の邂逅にまで発展したことは大きすぎる収穫であったと言える。きっかけは「台湾の画家の絵があった」ということだけである。この「台湾の画家」に気づくことができること、それにまつわる知識を持っていること、その知識が関連する人々とつながれること、その知識を伝播させる人間関係を持っていること、その知識が必要とされる人に届くことなどが実現可能な状態にあったからこそその成果である。このいずれの要素が欠けていたとしても出会いはなかっただろう。

知識を必要とする人々へ届け、知識を中心として人々が集まり共同体が形成されていくこと、知識を通じて外国とつながり、また外国からもつながってくることで、場が存在しコミュニティが出来上がり、ゆるやかに広まっていく。これこそが知識を基盤とした地域貢献であり、大学が行なうべき社会的役割の一つだろう。それぞれの活動は小さく細い流れのようなものであるが、それらを結びつけることができるのは学問にその力があるからである。

もちろん「気づくことができる」能力を獲得するのは容易ではない。増え続ける知識、新しく開発される方法論を吸収し続ける必要がある。これを抜きにした地域貢献には懐疑的にならざるを得ない。なぜなら面白い物の知識は人々を結びつけるものとならないからである。少なくとも筆者が交流した台湾・日本の人々が大学に求めていたものは学問であり、交流の柱としての学問が必要であることを強く認識することとなった。

小 括

一枚の絵画を起点にした探索が、一つの地域を国際的に開くきっかけとなった。防府市が長年図書館に飾ってきた絵画が、台湾と防府市をつなぐ扉になった。そして、この絵画を描かせた上山満之進という人物にも再度光が当たった。少なくとも防府市では、台湾の画家陳澄波を知る人が増えた。県立大学の授業科目としては「地域実習」として結実し、学生が台湾を通して日本の近代史を考えるきっかけも作ってきた。このことは、筆者の所属する国際文化学部国際文化学科が掲げてきた「学位授与方針」にある「文化の違いを越えて得た思考力と適確な判断力を統合して、未来に向けて人々と交流する力」や「多様な文化や価値を前提として人々と協働し、地域の特色や魅力を国内外にうち出す行動力」の育成に十分寄与したものと考えている。

現在予算や組織の問題で国際交流が実行しづらい側面があることは承知しているが、ここまで育てた山口と台湾との結びつきを放棄することは、大学の無形資産を放棄することに等しい。井竿は山口県立美術館で「陳澄波と近代日台の美術」のような展覧会を開催することで、集客力のあるイベント、また学術性の極めて高い行事が県立大学に提起できる力があることを示すことができなかつたかと考えたりもしている²⁹。山口県も台湾との交流に本腰を入れ、台湾ツアーとリンクした「山口と台湾をつなぐ旅」という講演・映画上映会を県観光連盟が企画し、参加者を募集する段階まで来ている（図6）。一過性の流行で終わらせないためには、イベントに文化の芯を入れる必要がある。そこ

図6:山口県観光連盟が企画した「山口と台湾をつなぐ旅」の広告。『サンデー西京』2018年11月17日付。



に県立大学がやれることはあると考える。このようなことを考えるに至ったのも、やはり「大地共創」という言葉以前から実行してきた本学の営みがあったからと信じている。

(付記) 本報告は、平成三〇年度山口県立大学研究創作助成(大地共創)による成果の一部である。

注

- 1 これは現在児玉識『増補版上山満之進の思想と行動』海鳥社、2016年として見ることができる。
- 2 上山君記念事業会編集・刊行『上山満之進』1941年。
- 3 ちなみに、慰労金の大半は上山によって創設間もない台北帝国大学の人類学研究に寄付された。これは台湾原住民研究に大いに寄与することになった。
- 4 安溪遊地・井竿富雄編著『東アジアにきらめく』山口県立大学、2016年。
- 5 2015年、台湾の芸術雑誌『今藝術』に絵画発見のいきさつが紹介される記事が掲載された。今もその記事は読める。(「神隠近一世紀、陳澄波消失的畫作在日本重現」「故事」サイト<https://gushi.tw/ccp-east-taiwan-coastal-road/>)
- 6 本文で出てくる安溪教授が台湾での地域実習を行っていたということが準備を円滑にしたことは記しておく必要がある。
- 7 前掲児玉『増補版上山満之進の思想と行動』に、このことは活写されている。上山は政党との特別な関係はない、と否認している。
- 8 前掲児玉『増補版上山満之進の思想と行動』。この記述のもとになった史料「留任二年の回顧」は、防府市図書館所蔵『上山満之進関係文書』に保管されている。筆者の一人井竿はこの対立と米騒動の関係について別稿を用意している。
- 9 波形昭一「第一次大戦後の金融危機と植民地銀行」『東アジア近現代通史』第4巻、2011年、岩波書店所収。この事件で若槻内閣が倒れたことで、上山は次の田中義一政友会内閣との関係に苦しむことになる。
- 10 実は田中義一首相は、一度は「上山辞任させず」の方針を天皇に伝えていた(1928年5月28日)のだが、突然その態度を翻して天皇から質問されている(1928年6月15日)。『昭和天皇実録』5巻、2016年、東京書籍。
- 11 梅田正己『日本ナショナリズムの歴史』3巻、高文研、2017年。
- 12 陳澄波については、後述する李淑珠氏の京都大学に提出した学位論文『「サアムシニグSomething」を描く：陳澄波(一八九五～一九四七)とその時代』2005年による。
- 13 今でも覚えているのは、陳氏の「公園は都市の肺である」という発言のうち「はい」という単語を日本人側で正しく漢字変換して理解するのに時間を要した事実である。
- 14 この件は放置すべきではないと考えているが、国立中正大學台湾文學研究所が大学院であるということもあり、学部との交流協定は締結できず、継続的な交流をするための準備がいるということで作業が中断している。
- 15 2017年の日本国際文化学会(宮崎公立大学)で、安溪・吉永による成果の発表が行われている(ほかに報告者として、当時台湾中央研究院所属の邱函妮氏)。作文と哲学ノート手稿の影印版は『陳澄波全集』第6巻、藝術家出版社、台北、2018年の一部として刊行されたが、文字起こしはさらに中国語の翻訳をつけて第11巻で刊行される予定である。井竿の担当した帝展批評の草稿は、新聞に掲載されたことは陳澄波文化基金会のサイトに記事の切り抜き写真があるのでわかるのだが、記事は部分的にしか残っていない。また、掲載紙が不明である(井竿は『台湾日日新報』と『台南新報』は確認したが、掲載されていない)。
- 16 例えば、国民党政権時代に政治犯として処刑された東京帝大卒の医師葉盛吉の日記(中央研究院台湾史研究所が2017年から刊行している)や、陳澄波と同時代に活躍した夭折の画家陳植棋の史料集(謝國興、王麗蕉編『陳植棋画作與文書選輯』中央研究院台湾史研究所、台北、2017年)に収められた書翰のかなりのものが日本語である。台湾では、第二次世界大戦後も日本語で文学活動をしていた人(例えば作家・黄靈芝。この人物は俳句も作った)がいることでも知られるように、日本統治下で行われた教育の影響が文

化面にかなり強い影響を与えている。

- 17 この作品は福岡アジア美術館常設展の第一枚目に飾られたこともある。美術の専門家から見ればそれだけの価値が存在するということである。
- 18 この時は、台湾在住のライター・謝ひかり（現在は栖木ひかり）氏も同行していた。氏はこののち、山口を台湾に紹介する著書『山口、西京都の古城之美：走入日本與台灣交錯的時空之旅』幸福文化、台北、2018年を台湾で上梓するに至った。また、日本への紹介版である『台湾と山口をつなぐ旅』も同年西日本出版社から刊行された。
- 19 井竿・吉永編著『上山満之進と陳澄波』山口県立大学、2017年。この冊子はヤマグチイーブックスサイト (<https://www.yamaguchi-ebooks.jp/>) で閲覧することができる。
- 20 この時の訪問ルートは、上山の視察した道のりと同じであることを後に陳立栢氏から聞いている。上山の阿里山視察は、総督府機関紙の役割を持っていた『台湾日日新報』に掲載されていた。防府市図書館にはその切り抜きが保管されている。
- 21 明治神宮の鳥居はその一つである。
- 22 下関市の乃木神社、防府市の毛利邸、そして防府天満宮であるといわれている。
- 23 その成果は田村剛『台湾の風景』雄山閣、1928年として刊行されている。この台湾調査の帰途、田村は下関港で事故に遭い、片足を失って登山家としての生命を絶たれた。
- 24 2018年に井竿は台湾・新北市の李梅樹紀念館を見学した。李梅樹の子孫から親しく説明を聴き、李梅樹が人生の後半をかけて修復に取り組んだ三峡祖師廟も訪問した。国民党政権時代に台北県議会議員を務め、自らの暮らす地域の精神的な拠点修復に取り組んだ姿勢は、陳澄波と通ずるものがあるように考えられる。
- 25 現在ここには森林鉄道の駅と、説明用のパネルのみがある。
- 26 日本人が台湾に対して持っている「親日的」というイメージは、往々にしてこの複雑性を単純化して説明してしまうという欠点がある。
- 27 この団体は、嘉義市が地元の古写真を市民から公募し、編集・刊行する『嘉義寫眞』の刊行など各種の文化事業を行っている。
- 28 『KANO』は1931年に台湾・嘉義農林学校が全国中等学校野球選手権大会で準優勝したという実際の出来事をテーマにした2014年制作の台湾映画。
- 29 実際に、陳澄波の絵画が一時寄託されていた福岡アジア美術館では、「日本時代の台湾美術」「陳進展」「東京・ソウル・台北・長春－官展にみる近代美術（日本国内の帝展、台湾の台展、朝鮮の鮮展、満州国美術展覧会を網羅した帝国の美術ネットワークを示したものであった）」など、台湾の近代美術を扱った展覧会が開催されている。山口との関連性をも含めた展覧会にすることは可能ではないだろうか。かなりの費用と準備がいるということはあるが、山口県立美術館にとってその名声を損なうことにはならないと考える。